

中世末期日本語の～テイル・～テアルについて

——動作継続を表している場合を中心に——

福嶋健伸*

キーワード：～テイル/～テアル、動作継続、進行態、文法化、アスペクト (aspect)

要 旨

中世末期日本語の～テイル・～テアルは、発話に関係する例を除くと、動的な動作継続を表している例が少ない。現代日本語の～テイルには見られないこのような偏りが、中世末期日本語の～テイル・～テアルに見られるのは、当時の～テイル・～テアルには、まだ、存在動詞イル・アルの意味が、現代日本語に比べて強く残っており、アスペクト形式への文法化が相対的に不十分だったからである。

0. はじめに

現代日本語の動詞の多くは、～テイル・～テアル^{*1}という形式をとって状態を表している。現代日本語の～テイルは、全ての動作継続と結果継続を表せることから、アスペクト形式として、高度に文法化していると判断できる^{*2}。また、～テアルには、包括性の欠如^{*3}が指摘されているが、これは、～テアルのアルに存在動詞の意

* 日本学術振興会特別研究員（DC2） e-mail address: fukusima@lingua.tsukuba.ac.jp

*1 時制を問題としない場合は、～テイル・～テアルという形で～テイタ・～テアックも代表させる。

*2 ただし、現代日本語の～テイル・～テアルに存在動詞イル・アルの意味が全くないと考えていない。このことに関しては、益岡1992、杉本1988、岡1999参照。

*3 工藤1995参照。包括性の欠如とは、「死んである」「流れてある」とはいえないように、運動動詞であっても、タイプによっては～テアル形式を受け入れないことを意味する。

味が強く残っていることを示しているのではない。むしろ、この包括性の欠如は、他動詞につき格変換を起こすという、～テアルの形式としての働きに関連すると考えた方がより自然であり、現代日本語の～テアルも、ある程度、文法化しているといえるだろう。文法化しているということは、存在動詞イル・アルの表す語彙的意味が薄いことを意味しており、現代日本語の～テイル・～テアルは、存在文から、かなりの程度、解放されていると言って差し支えない。

先行研究によれば、この～テイル・～テアルという形式は、室町時代以降、盛んに用いられるようになった形式であるといえる^{*4}。特に、坪井1976と柳田1990は、室町後期から江戸初期の～テイル・～テアルに関して、およそ次のことを指摘している。

- (1) a. ～テイルも～テアルも共に、自動詞・他動詞の別なく接続し、進行態と已然態^{*5}を表していた。
- b. ～テイルの主格は有情物に限定されるが、～テアルの主格は有情物・非情物のどちらでもよい。

上記(1)の指摘は、中世末期日本語の～テイル・～テアルを記述する上で、非常に重要である。しかし、「進行態・已然態」と言われているものの中にも、存在文との近さに関して程度差があるだろう。その点を考慮すると、先行研究の指摘だけでは、次の点が曖昧であり、疑問が残る。

- (2) 中世末期日本語の～テイル・～テアルは、現代日本語の～テイルのように全ての動作継続と結果継続を表していたのか、それとも、一部の動作継続と結果継続を表していたものの、全ての動作継続と結果継続を表していたわけではなく、何らかの分布の偏りがあったのか。

(2)の疑問は、現代日本語の～テイル（あるいは～テアル）と比べて、中世末期日本語の～テイル・～テアルが、どの程度、文法化していたのかを考える上で重要であり、当該時代の資料に即して検証する必要がある。

*4 上代の～テアリと近代の～テアルとを連続したものとして見る柳田1987では、「テアルの復活」という言い方をしている。

*5 それぞれ、本稿でいう「動作継続」と「結果継続」にはば相当する。

この～テイル・～テアルの文法化の問題に関連して、福嶋1999及び福嶋2000では、現代日本語に比べ、中世末期日本語の～テイル・～テアルには、存在動詞イル・アルの意味が強く残っているため、アスペクト形式として相対的に不十分であり、その不十分さを～タと基本形が補っていたことを指摘した。

本稿では、中世末期日本語の～テイル・～テアルが動作継続を表している場合を中心に考察を行い^{*6}、分布の偏りがあることを指摘する。結論を先取りして述べると次のようになる。

(3) 本稿の結論：

中世末期日本語の～テイル・～テアルは、現代日本語の～テイルのように全ての動作継続を表していたのではない。この時代の～テイル・～テアルには、発話に関係する例を除いて動的な動作継続を表している例は少ないという分布の偏りが見られる。

以下、まず、第1節では、「動的な動作継続」と「静的な動作継続」という用語について説明する。次に第2節では、～テイル・～テアルが終止法で現在の状態を表している場合を観察し、第3節では、～テイル・～テアルが終止法で過去の状態を表している場合を観察する。また、第4節では、～テイル・～テアルが非終止法で状態を表している場合を観察する。非終止法で状態を表している場合には、形の違い(～テイル/～テイタ/～テイテなど)を考慮せずに観察する。最後に第5節で本稿の結論をまとめる。

1. 「動的な動作継続」と「静的な動作継続」について

現代日本語の～テイルは、「動作継続」「結果継続(及び単なる状態)」「反復・習慣」「動作パーフェクト」等を表すといわれている。これらの概念は、現代日本語の～テイルという形式だけに適用されるものではなく、場合によっては他の形式^{*7}にも適用可能な、特定の形式にとらわれない概念である。

以下、本節では、「動作継続」といわれている状態を「動的な動作継続」と「静

*6 結果継続を表している場合については別稿で論じたい。

*7 例えば、宇和島方言の～ヨル・～トルや中世末期日本語の～タ、中古日本語の動詞基本形や～タリ等。

的な動作継続」とに分けることにする。便宜上、現代日本語の～テイルを例にとって「動的な動作継続」と「静的な動作継続」について説明したい。

本稿でいう「動的な動作継続」とは、副詞「ゆっくり」をつけたときに、具体的な動きが遅いという解釈ができる動作継続のことである。金水1995でいう強進行態、あるいは移動を含意する動作継続などが、動的な動作継続にあたる。典型的な例は次の通りである*8。(4)(5)は、現在の動的な動作継続の例であり、(6)(7)は、過去の動的な動作継続の例である。

- (4) 哲郎が枝をゆっくり折っている。(「折る」動きが遅い)
- (5) 哲郎が駅に向かってゆっくり走っている。(「走る」動きが遅い)
- (6) 庭の方を見ると、哲郎が枝をゆっくり折っていた。(「折る」動きが遅い)
- (7) グランドの方を見ると、哲郎がゆっくり走っていた。(「走る」動きが遅い)

また、次に見る(8)～(13)のような動作継続の例は、副詞「ゆっくり」をつけたときに、具体的な動きが遅いという解釈が困難である*10。このような動作継続の例を「静的な動作継続」と呼ぶことにする。典型的な例は次の通りである。(8)～(10)は、現在の静的な動作継続の例であり、(11)～(13)は、過去の静的な動作継続の例である。

*8 動作継続の～テイルは、以下の例のように、ある一定時間、どこかの場所で、何らかの状態でいたことを述べる場合もある。

- ・さっきまで、(彼女の家で) ゆっくりラーメンを食べていた。
- ・昨日は、2時から3時まで、(グランドで) ゆっくり走っていた。

しかし、このような例は、具体的な運動自体に焦点があるか疑問であり、また、「ゆっくり」をつけたとき、「具体的な動きが遅い」という解釈がしにくくなることから、現段階では、動的か静的かに関しての判断を保留する。従って、本稿では、このような例は「動的な動作継続」の確例から外れることになる。なお、このような例を動的な動作継続と考えたとしても、本稿の結論には、大きな影響はない。

*9 「殺している・折っている」等の強進行態の場合、許容度が若干落ちるという日本語話者がいる。なぜ、そのような現象が起こるのかについては、別稿で述べたい。

*10 (8)(9)(11)(12)のような例は、「ゆとりをもって・ゆったりとして」というような解釈なら可能である。また、(10)(13)のような許容できない例も、具体的な動きが遅いという解釈が困難であることには変わりない。従って、本稿ではどちらの場合も「静的な動作継続」と考える。

- (8) 哲朗がゆっくり休んでいる。
 (9) 哲朗がゆっくりテレビを見ている。
 (10) *哲朗がゆっくり黙っている。
 (11) 哲朗がゆっくり休んでいた。
 (12) 哲朗がゆっくりテレビを見ていた。
 (13) *哲朗がゆっくり黙っていた。

次節からは、中世末期日本語の～テイル・～テアルには、本節で示した(4)～(7)のような動的な動作継続の典型例が、発話に関する動作継続を除いて、ほとんど見られないことを確認していく。

2. ～テイル・～テアルが終止法で現在の状態を表している場合

本稿では、狂言台本虎明本、天草版平家物語、天草版伊曾保物語、醒睡笑、きのふはけふの物語を資料として調査を行った*11。当該資料中、～テイル・～テアルが、終止法で現在の状態（動作継続、あるいは結果継続等）を表していると考えられる例は、延べ105例*12（～テイル65例、～テアル40例）、異なりで76例（～テイル49例、～テアル27例）あった。そのほとんどが、以下に見るように、動的な動作継続以外の状態（静的な動作継続や結果継続など）を表している。

*11 会話文だけではなく、地の文・注記からもデータを集めた。ただし、和歌・語り・謡等の例は調査対象外とした。会話文と判断した場合は、「会」と略して示し、地の文、注記も同様に略して示す。また、登場人物の別を考慮せずデータを集めた。さらに、～テイルのイルが明らかに「入る、座る」であると判断できる例、～テアルが明らかに過去を表しており状態を表していないと判断できる例は、調査対象から外したが、判断に迷う場合は調査対象とした。今回の調査では、受動文も考察対象としている。ただし仮に受動文を考察対象から外したとしても、本稿の結論には、ほとんど影響はない。以下、他の節でも調査対象は同様である。また、次の例のように命令を表している例も、便宜上、本節での観察対象としている。

・まづ是へきていよ

(虎明本・不聞座頭・会)

*12 注11で述べた通り、状態を表しているかどうか判断に迷う例も調査対象にしているので、用例数が多くなっている。以下、他の節でも用例数については同様である。

〈～テイルの例〉

- (14) されはこそ是にふせつてゐる、 (虎明本・抜殻・会)
 (15) つれほしうて是にまつてゐる、 (虎明本・昆布売・会)
 (16) にわうのまねしている (虎明本・仁王・注)
 (17) まつごぜがさきへ行、西もんに立ている (虎明本・警女座頭・注)
 (18) 清水へまいり、おがみ、つやしている、 (虎明本・居杭・注)
 (19) かへりみれば、しんほちねてゐる、 (虎明本・花折新発意・注)

〈～テアルの例〉

- (20) 誠にいほがこしらへて有は (虎明本・鳴子・会)
 (21) たのしうなさうと思ふて、是へ出て有よ (虎明本・福の神・会)
 (22) 身共はかたわ物かかへらると云に付てきてある (虎明本・三人片輪・会)
 (23) 三郎殿といひあはせて、きたりてあるぞ (虎明本・夷大黒・会)
 (24) 今日帝王の此殿へ行幸なされて有 (虎明本・唐相撲・会)
 (25) 壁の根に菊一本咲てあり。 (醒睡笑・地)

これに対して、終止法で現在の動的な動作継続を表している確例は、いずれも発話動詞「云う」の動作継続である^{*13}。

- (26) [太郎冠者が独り言を言っているのを主人が見つける]
 むさとしたる事を、ひとり事に云ている、 (虎明本・腥物・会)
 (27) しらぬかほで、云ている (虎明本・腥物・注)

このように、現在の動的な動作継続を表している例は、当該資料中、(存疑例を含めても) 3例にとどまることから、～テイル・～テアルが終止法で現在の動的な動作継続を表している例は少ないと判断される。

*13 次の例は、動的な動作継続と考えて良いか分からないため存疑例としておく。

・茶の湯にすいたれば、おくのまにしかけておいたが、いかにもりんりんんと、
たぎつてある、 (虎明本・鱧包丁・会)

3. ～テイル・～テアルが終止法で過去の状態を表している場合

当該資料中、～テイル・～テアルが、終止法で過去の状態を表していると考えられる例は、延べ42例(～テイル23例、～テアル19例)、異なりで40例(～テイル23例、～テアル17例)あった^{*14}。第2節同様、そのほとんどが、以下にみるように、動的な動作継続以外の状態を表している。

〈～テイルの例〉

- (28) よびにやつて参るあひだまつていりました (虎明本・呼声・会)
 (29) つれほしうて是にやすらふていりました (虎明本・餅酒・会)
 (30) 内にも兵どもひま、はざまもなう満ち満ちていた (天草平家・地)
 (31) 道にて、碁を見ていた。 (きのふはけふ・地)
 (32) 何としてひつこふていたぞ (虎明本・武悪・会)

〈～テアルの例〉

- (33) 兵ども前後にうち困うてあつた。 (天草平家・地)
 (34) 目さめて、かの金をさぐりて見れ共、金はあとかたちもなく、はこはしたかたたれてあつた。 (きのふはけふ・会)
 (35) 源平いづれもひまもない体と見えてあつたと申す。 (天草平家・地)
 (36) これてぞつとすうだあのお五のむまれとしに此ふくべがなりてあつたと (醒睡笑・会)

これに対して、終止法で過去の動的な動作継続を表している確例は全て、(37)～(40)のような例であり、発話に関係する動作継続であると考えられる^{*15}。

*14 本節で扱う例は、～テイル・テアルが、～タ・～ケリ等の形式を伴って過去を表している例である。

*15 次のように、動的な動作継続を表しているかどうかの判断が難しい「～事ヲシテイタ」「～事シテイケリ」という例が2例あった。これらの例は、現段階では扱いを保留する。

・あるとき、昼事をしておられた。 (きのふはけふ・地)
 ・民家にむはら集り茶事して居けるが (醒睡笑・地)

- (37) 心にもをこらぬ念誦していられた。 (天草平家・地)
(38) 嵯峨の奥な山里に柴の庵をひき結んで、念仏申していた。 (天草平家・地)
(39) 沙汰のかきりそいつは観音經を一部いふてあつたと。 (醒睡笑・会)
(40) あなくろぐる黒き頭かな、いかなる人の漆ぬりけんとゆうてはやされてあつた。
(天草平家・地)

以上、当該資料中で、～テイル・～テアルが終止法で過去の動的な動作継続を表している確例は、発話に係る動作継続のみであることを確認した。

4. ～テイル・～テアルが非終止法で状態を表している場合

当該資料中、～テイル・～テアルが、非終止法で状態を表していると考えられる例は、延べ218例(～テイル150例、～テアル68例)、異なりで146例(～テイル96例、～テアル50例)あった。第2節や第3節と同様に、そのほとんどが、以下に見るように、動的な動作継続以外の状態を表している。

〈～テイルの例〉

- (41) わたくしのやしやぢになつていて、とめやうがござる (虎明本・石神・会)
(42) 去ながら弓をもつているに依て、れうけんもなかつた、(虎明本・禁野・会)
(43) たつてゐるをひきすゆる (虎明本・朝比奈・注)
(44) 横田河原とゆうに陣をとっているを木曾わ聞いて、 (天草平家・地)
(45) みてまいらふと云てねているをみ付て、 (虎明本・悪太郎・注)
(46) 心安く思ふていたが、 (虎明本・武悪・会)

〈～テアルの例〉

- (47) 某がとうきて有に、何とてそれにいる、 (虎明本・鍋八撥・会)
(48) その風呂屋の前に鋭な石が一つ出てあつたが、出入りの人の足を傷り、
(天草伊曾保・会)
(49) 道行、しやくやくの花が、人のうらにみ事に、さひてあるをみて、
(虎明本・土筆・注)
(50) なんちがきたつて有程に、 (虎明本・朝比奈・会)
(51) もはやかたはしはちりがたになつて、下におちて有がなを見事で、
(虎明本・萩大名・会)

非終止法で動的な動作継続を表していると思われる確例は、ほとんどが以下に見るように、発話に関する動作継続である。

- (52) とかくこのやうにいふていたぶんでもなるまひ、 (虎明本・乞聲・会)
 (53) 太郎くわじや、そらうでのことくいふているを、み付て (虎明本・腥物・注)
 (54) 灯をかすかにかきたてて親子三人念仏していたところに、 (天草平家・地)
 (55) いやそなたは留守じやと云てあつたが (虎明本・八句連歌・会)

一方、次の例は、一見、動的な動作継続を表しているように思われるが、以下の理由から確例とはいえない。

- (56) [行綱は]目うちしばたたいていたが、平家の繁昌する様態を見るに、当時たやすう傾けがたい儀ぢやに、由ないことにくみしたものかな！ (天草平家・地)

「目うちしばたたく」は、熟考したり状況を展望したりするさまの形容であり、「まばたきして考えていた」と解釈できる^{*16}。
 ただし、次の2例だけは、動的な動作継続を表していると考えられる。

- (57)^{*17} 親義とゆう者があなたにものを書いていたが、 (天草平家・地)
 (58) 筑紫の五百羅漢へ参る時、はりまのいなみ野をとをつてあれは、おほきな牛がふせつておつて、 (虎明本・法定・会)

*16 『平家物語全注釈』上巻(富倉徳次郎著・角川書店・1966)、『完訳 日本の古典 第42巻 平家物語』(一)(市古貞次校注、訳・小学館・1985)の同一場面にも、「目うちしば(ただ)たいてゐたりけるが」とあるが、本稿とほぼ同様の解釈がなされている。

*17 (57)の例には場所二格句がある。この二格句が主体の存在場所を表す場所二格句であれば、「あなたに(ものを書いている状態で)親義が存在する」という存在文よりの解釈が可能である。そのため(57)を動的な動作継続を表している確例から外すという考え方もあるだろう。しかし、現段階では、この二格句についての見解を保留しているため、(57)を動的な動作継続の確例としておく。

以上、当該資料中、～テイル・～テアルが動的な動作継続を表している確例は、2例を除いて、発話に関係する動作継続のみであることを確認した。

5. まとめ

中世末期日本語の～テイル・～テアルが状態を表していると考えられる例は、全部で延べ365例ある。そのうち、発話に関係している例を除くと、動的な動作継続の確例は2例しかない。このことから、次のことが指摘できると判断した。

(59) 本稿の結論：

中世末期日本語の～テイル・～テアルは、現代日本語の～テイルのように全ての動作継続を表していたのではない。この時代の～テイル・～テアルには、発話に関係する例を除いて動的な動作継続を表している例は少ないという分布の偏りが見られる。

さらに本節では、なぜ、中世末期日本語において、(59)のような分布の偏りが見られるのかを考えてみたい。

この時代の～テイル・～テアルには、まだ、存在動詞イル・アルの意味が現代日本語に比べて強く残っていたと考えられる。

～テイルについていえば、(1)の指摘にもあるように主格は有情物に限定されることや、福嶋1999で指摘したように、当該資料中には動作パーフェクト（いわゆる経験）と解釈できる～テイルがないこと等からイルの意味が強いことが確かめられる。

～テアルについていえば、虎明本の中で主格が有情物である場合、荘重さをもたせて語る会話文に用いられることが多いという指摘がある^{*18}。また、虎明本の呼び出しにあらわれるアルは厳肅な雰囲気を持つ曲に多いという傾向も指摘されている^{*19}。これらの傾向は、アルの性格が、～テアルという形式に影響を及ぼしていることを

*18 柳田1990参照。柳田1990では、「テアル」が文語色を帯びてきていたのではないかと指摘している。

*19 金水1997参照。呼び出しとは、「あるかやい、いたか」等の冠者等と呼ばい出すときの台詞を指している。

示しており、アルの意味が強かったことが確かめられる^{*20}。

以上のことから、現代日本語に比べ、中世末期日本語の～テイル・～テアルには、まだ、存在動詞イル・アルの意味が強く残っており、文法化が相対的に十分ではなかったといえる。そのため、動的な動作継続を表している例が少ないという分布の偏りが起こるのではないかと考えた。このように考えると、発話に係る動作継続は、他の動的な動作継続に比べて、存在動詞イル・アルの表している状態に近いのではないかと予測される。

繰り返すことになるが、福嶋1999及び福嶋2000で指摘したように、中世末期日本語の～テイル・～テアルは、現代日本語に比べ、イル・アルの意味が強く残っているため、アスペクト形式として相対的に不十分であり、その不十分さを中世末期日本語の～タと基本形が補っていたと考えられる。

もし、中世末期日本語で状態を表していた形式（～テイル・～テアル、～タ、基本形）に見られる分布の偏りが、当時の～テイル・～テアルにイル・アルの意味が、現代日本語に比べて強く残っていたことの反映であるならば、中世末期日本語の～テイル・～テアル、～タ及び基本形の分布の偏りを説明する際には、存在文が表している状態に近い状態（野村1994の「存在様態」か、あるいは外延的に極めてそれに近い概念）という概念が説明に有効であると考えられる。この点に関しての詳しい議論は別稿で論じたい。

また、安2000等を見ると、現代韓国語で～テイルに相当する形式(-ko iss-ta と -e/a iss-ta)にも存在動詞(iss-ta)の意味が比較的強く残っているようであり、中世末期日本語の

*20 坪井1976では、[有情の存在＝イル・非情の存在＝アル]の使い分けの成立と[（已然態における）有情物の状態＝テイル・非情物の状態＝テアル]の使い分けの成立が併行していたと指摘している。この現象も～テアルに「アル」が影響を及ぼしていたことの傍証となる。ただし、（現代日本語のように）格の変換を行う～テアルと、（中世末期日本語のように）格の変換を行わない～テアルとを同一視することはできず、「格の変換」という観点も交えての考察が必要である。また、～テアルには、いわゆる経験を表している例もあるが、このような～テアルについての詳細な検討も必要である。しかしいずれにせよ、中世末期日本語の～テアルに何らかの制約（アルの意味が強く残っている、あるいは文体的に偏りがある等）を認めるのであれば、本稿の見解と大きく矛盾することはない。

～テイルの特徴と、ある種の共通性が見られる^{*21}。この点についても、稿を改めて詳しく論じることにしたい。

〈参考文献〉(ハングルはローマ字表記)

- 安 平 編 1999 「現代韓国語の「-ess-」形による「現在の状態」を表す場合の条件をめぐって」(筑波大学 科学研究費報告書『空間表現の文法化に関する総合的研究』)
- 安 平 編 2000 「「ある/いる」と「iss-ta」——日韓対照の観点から——」(筑波大学『東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究報告書平成11年度Ⅲ)
- 岡 智之 1999 「存在構文に基づくテイル(テアル)構文——認知言語学的アプローチによる文法構文の研究——」(大阪外国語大学『EX ORIENTE』1)
- 岡 智之 2000 「存在型アスペクトとしての朝鮮語 [ko/eo iss-ta] 構文——認知類型論と日朝対照の観点から——」(大阪外国語大学『EX ORIENTE』3)
- 奥田靖雄 1978 「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」(『教育国語』53, 54)
- 生越直樹 1997 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について——結果状態形との関係を中心に——」(『日本語と朝鮮語(下)』くろしお出版)
- 北村仁美 1985 「様態副詞「ゆっくり(と)」の意味記述——述語動詞との共起関係から——」(東北大学『国語学研究』25)
- 金水 敏 1982 「人を主語とする存在表現——天草版平家物語を中心に——」(東京大学『国語と国文学』59-12)
- 金水 敏 1995 「いわゆる「進行態」について」(『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院)
- 金水 敏 1996 「日本語のアスペクト形式の類型」(『国語学会平成8年度春季大会要旨集』)
- 金水 敏 1997 「現在の存在を表す「いた」について——国語史資料と方言から——」(『日本語文法・体系と方法』ひつじ書房)
- 金水 敏 1999 「近代語の状態化形式の構造」(『近代語研究』第十集 武蔵野書院)
- 工藤真由美 1995 「アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——」(ひつじ書房)

*21 現代韓国語のテンス・アスペクト体系について、安平編氏(筑波大学)から有益なアドバイスを頂いた。記して感謝申し上げる。

- 黒田 徹 1993 「万葉集のテンス・アスペクト」(『国文学 解釈と観賞』58-7)
- 杉本 武 1988 「動詞+ている」の表すアスペクトについて」(『論集ことば』くろしお出版)
- 鈴木 泰 1992 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』(ひつじ書房)
- 鈴木 泰 1993a 「源氏物語会話文における動詞基本形のアスペクト的意味」(武蔵大学『武蔵大学人文学会雑誌』24-2・3)
- 鈴木 泰 1993b 「時間表現の変遷」(『月刊言語』22-2)
- 坪井美樹 1976 「近世のテイルとテアル」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社)
- 土岐留美江 1999 「現代韻文資料における日本語動詞基本形のテンス」(京都大学『國語國文』68-6)
- 野村剛史 1994 「上代語のり・タリについて」(京都大学『國語國文』63-1)
- 野村雅昭 1969 「近代語における已然態の表現について」(『佐伯梅友博士古希記念国語学論集』表現社)
- 福沢将樹 1997 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティ」(『国語学』191)
- 福嶋健伸 1999 「中世末期日本語のシタについて——終止法で継続相現在を表す場合を中心に——」(『国語学会平成11年度春季大会要旨集』)
- 福嶋健伸 2000 「中世末期日本語の基本形について——終止法で現在の状態を表している場合を中心に——」(『国語学会平成12年度春季大会要旨集』)
- 益岡隆志 1992 「日本語の補助動詞構文——構文の意味の研究に向けて——」(『文化言語学 その提言と建設』三省堂)
- 松本泰丈 1993 「メノマエ性」をめぐって——しるしづけのうつりかわり——」(『国文学 解釈と観賞』58-7)
- 柳田征司 1987 「近代語「テアル」」(愛媛大学『愛媛国文と教育』19)
- 柳田征司 1990 「近代語の進行態・已然態表現」(『近代語研究』第八集 武蔵野書院)
- 山口佳紀 1987 「各活用形の機能」(『国文法講座 第二巻』明治書院)
- 山下和弘 1988 「「テ+イル」と「テ+アル」」(九州大学『語文研究』65)
- 山下和弘 1996 「中世以後のテイルとテアル」(京都大学『國語國文』65-7)
- 湯澤幸吉郎 1929 『室町時代の言語研究』(大岡山書店)(再版『室町時代言語の研究』1958 風間書房)

〈調査資料〉

用例等を示す場合、表記を変えている場合がある。テンス・アスペクトの意味に影響がないと判断した場合、助動詞・補助動詞が含まれている例も調査対象とした。原則として、「候ふ」「給ふ」等が接続している例、及び～テイタリの例は対象外とした。～テイル・～テアルともに疑問文の場合も調査対象とした。虎明本の風流之本、万集類は調査対象外とした。

- ・池田廣司・北原保雄 校注『大蔵虎明本狂言集の研究』上中下巻、表現社、1972（略称：虎明本）
- ・江口正弘 著『天草版平家物語対照本文及び総索引（本文篇）』、明治書院、1989（略称：天草平家）
- ・京都大学文学部国語学国文学研究室編『文禄二年耶蘇会板伊曾保物語本文・翻字・解題・索引』、京都大学国文学会、1963（略称：天草伊曾保）
- ・岩淵匡他 編『醒睡笑静嘉堂文庫藏本文編』、笠間書院、1982（略称：醒睡笑）
- ・『きのふはけふの物語』小高敏郎 校注『江戸笑話集』（日本古典文学大系）、岩波書店、1966（略称：きのふはけふ）

[付記]

本稿は、日本学術振興会の研究助成及び平成12年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

(2000年6月22日 受理)